

ウイグル語の移動動詞

藤家洋昭 (大阪大学) Reyihan Pataer (甲南女子大学)

1. はじめに

ウイグル語にも、他の多くの言語と同様、移動動詞と呼ぶことができるものが存在するが、それらが具体的にどのような性質を持っているかは必ずしも明らかにされていない。ウイグル語の研究は伝統的な枠組みによるもの[5][6]が多く、比較的最近の枠組みによって記述されたものはほとんどない。

本研究では、ウイグル語の移動動詞を、比較的最近の枠組みによって分析・記述し、ウイグル語の移動動詞を明らかにする。

2. 移動動詞

移動とは、物体が時間の推移とともに位置を変えることであり、そのような状況を表す動詞を移動動詞と呼ぶ[3]。移動動詞には空間表現が必要であるとされている[3]。ウイグル語の移動動詞がどのような空間表現をとるかについてこれまでほとんど明らかにされていない。また、言語によっては、場合により、移動表現が単独の動詞では表されずに複合述語で表す必要があることが指摘されている。例えば日本語では、「彼女は部屋の中から**走った**」では落ち着きが悪く、「彼女は部屋の中から**走り出た**」のように、複合動詞にする必要がある[3]。ウイグル語についてはこの点についてもほとんど明らかになっていない。

また、これまでの研究[3][4]から、一般に移動動詞には、有方向移動動詞、移動様態動詞のような種類があることがわかっている。これらは、時間を表す副詞的修飾語句をつけたときの解釈で区別することができる。本研究ではこれらのことを念頭において分析する。

3. データ

各種辞書類[1][7][9][11]から収集した動詞をもとに例文を作成し、ウイグル語ネイティブスピーカーのテストにより得られたのが以下のデータである。

ここで、格についてふれておく。ウイグル語は、名詞の格を格語尾(主格:語尾なし、属格: -ning、与格: -ge/-gha/-qa/-ke (「与」と略す)、対格: -ni (「対」と略す)、奪格: -din (「奪」と略す)、位格: -de/-da/-ta/-te (「位」と略す))によって表す。

それぞれ、大まかに言って日本語の格助詞「~の」「~へ、~に」「~を」「~から」「~で(~において)」に相当するが、主格を表す形式はなく、移動に関係する格で言えば、日本語の「~へ」と「~に」の区別がないことに注意したい。

1. a. Tursun saet 2 de mektepke **mangdi**. 「トルスン(人名)は2時に学校へ出発した。(2時=どこかわからないが)離れた時刻)」

b. Tursun saet 2 de öydin **mangdi**. 「トルスンは2時に家を出発した。(2時=家を離れた時刻)」

2. a. Saet 3te Tokyogha **keldim**. 「3時に東京に来た(3時=東京に着いた時刻)」

b. Saet 3te Tokyodin **keldim**. 「3時に東京から来た(3時=(どこかわからないが)着いた時刻)」

c. *3 saet Tokyogha **keldim**.

3 時間 東京 (与) 来た

3.a. Saet 3te Tokyogha **bardim**. 「東京に行った。(3時=東京に着いた時刻)」

b. *Tokyogha **bardim**, emma Tokyogha

- 東京 (与) 行った しかし 東京 (与)
 yétip baralmidim.
 たどり着けなかった
- c. *3 saet Tokyogha **bardim.**
 3 時間 東京 (与) 行った
4. a. Béketke **bardim.** 「駅に行った。」
 b. *Béketke **yügürdüm.**
 駅 (与) 走った
 c. Béketke qarap **yügürdüm.** 「駅に向かって走った。」
 d. Béketke qarap **yürgürdüm,** emma béketke yétip baralmidim. 「駅に向かって走ったが駅にたどり着けなかった。」
 e. 10 minut béketke qarap **yügürdüm.** 「10 分間 駅に向かって走った。」
5. a. *Tursun Yokohamagha **su üzdi.**
 トルスン 横浜 (与) 泳いだ
 b. Tursun Yokohabagha qarap **su üzdi.** 「トルスンは横浜に向かって泳いだ。」
6. a. Deryadin **öttuq.** 「川を渡った。」
 b. *Deryani **öttuq.**
 川 (対) 渡った
 c. 10 minutta deryadin **öttuq.** 「10 分で川を渡った (川を渡るのに 10 かかった)。」
 d. *10 minut deryadin **öttuq.**
 10 分 川 (奪) 渡った
7. a. Tursun yerastigha **chüshti.** 「トルスンは地下へおりた。」
 b. Tursun yerastigha **chüshüp ketti.** 「トルスンは地下に落ちた。」
 c. Tursun tögidin **chüshti.** 「トルスンはラクダからおりた。」
 d. Tursun tögidin **chüshüp ketti.** 「トルスンはラクダから落ちた。」
 e. Bahasi **chüshti.** 「値段が下がった。」
8. a. Müshükni öydin **teptim.** 「ネコを家から蹴り出した。」
 b. Müshükni öydin **tépip chiqiriwettim.** 「ネコを家から蹴り出した。」
9. a. Tursun usul **oynidi.** 「トルスンは踊りを踊っ

た。」

- b. *Tursun ashxanigha **usul oynidi.**

トルスン 食堂 (与) 踊り 踊った (「トルスンは踊りを踊りながら食堂に行った。」という意味にならない)

以下の章でこれらを分析・記述する。

4. 分析・記述の枠組み

本研究は語彙主義の立場に立ち、語彙概念構造 (LCS: Lexical Conceptual Structure) [4][8]を組み合わせ込んだ主辞駆動句構造文法 (HPSG: Head-driven Phrase Structure Grammar) [2][10]の枠組みで分析・記述する。

本研究では次の意味関数を基本にしている。

1. 状態 BE
2. 変化 BECOME
3. 活動 ACT
4. 移動 MOVE
5. 使役 CAUSE

5. 分析・記述

2 章で見た移動動詞に関する枠組みをもとに前章でとりあげたデータを分析する。

mang-類

1.a、1.b.に見られるように、起点と着点の両方をとることができる。時間を表す副詞的修飾語の解釈から、起点指向であることがわかる。すなわち、起点指向の有方向動詞であると言える。

[1] ACT [1] CAUSE [BECOME [1] BE [NOT-AT 2]]

kel-類

2.a、2.b.に見られるように、起点と着点の両方をとることができる。ウイグル語では、一般に、必ずしもすべての項が統語的に具現化するわけではない。時間を表す副詞的修飾語の解釈から、着点指向であることがわかる。1c.から完了相であることがわかる。

bar-類

3.a. と 3.b.の対比から、与格名詞句と共起し、

その与格名詞句に到達したことを含意することがわかる。これらのことから、着点指向の有方向動詞である。

yüür-類

4.a.,4.b.,4.c.の対比から、yüür-は、bar-類とは反対に、与格名詞句とは共起しない。注目すべきは、3.b.と4.d.の違いで、このことから、yüür-は、着点到達を含意しないと言うことができる。同じことは5.のsu üz-にもあてはまる。すなわち、これらは非有界的な移動動詞であると言える。また、-ge qarap「～にむかって」とも共起するが、本研究ではこれを項ではなく付加語と考える。

これらのことから、yüür-類は次のようなLCSを持つと考えられる。

[1]ACT [1] CAUSE [1] MOVE]

öt-

6.a.に見られるように、経路は-din (奪格)で表される。この-dinは、起点を表す形式と同じである。このため、ウイグル語には経路を表す専用の形式はないと考えられる。ちなみに、7.b.に示したように、日本語において経路を表す「～を」をウイグル語に直訳した「-ni (対格)」で経路を表すことはできない。そしてまた、6.c.,6.d.に示した、時間を表す副詞的修飾語との共起関係と解釈から、öt-は完了相の動詞であると言える。このことから、LCSでは、MOVEではなく、BEを持つと考えられる。

[1]ACT [1] CAUSE [1] BE AT [2]

chüsh-

7a.,7cから、chüsh-は起点をとる場合と着点をとる場合があることがわかる。これは、起点あるいは着点のいずれかの省略ではなく、起点指向のchüsh-と着点指向のchüsh-の二つがあると考えの方が妥当である。このことは、時間を表す修飾語の解釈から裏付けられる。さらに、chüsh-に関しては、7eから、物理的移動を表すものではないものの、起点も着点も表さない場合があることがわかる。これらのことからchüsh-は、起点指向、着点指向、起点指向でも

着点指向でもないものの三つに分けられ、それぞれ次のようなLCSを持つと考えられる。

[1]ACT [1] CAUSE [BECOME [1]BE AT [2]]

[1]ACT [1] CAUSE [BECOME [1]BE NOT-AT [2]]
[BECOME [1]BE AT DOWN]]

また、「おりる（意思を持って下方に移動する）」と「落ちる（意思を持たずに下方に移動する）」の違いを、7.c.と7.d.の対比から、ウイグル語では語の違いではなく、単純述語と複雑述語の違いで表すことがわかる。複雑述語と意思との関係がどのようになっているか、現在のところよくわかっていない。

tep-

「蹴る」のような、働きかけを意味する動詞が移動動詞の意味を持つ言語があるが[4]、ウイグル語ではどうだろうか。8a.に示したように、（日本語とは異なり）tep-単独でも蹴った対象が移動するという意味を持つ。8b.のように複雑述語にすることもできる。8.a.のtep-のLCSは次のようになると考えられる。

[1]ACT ON [2]

CAUSE [BECOME [2]BE NOT-AT [3]]

一方、「踊る」などを意味する、いわゆる舞踏動詞で移動を表すことができるものを見つけることはできなかった。9.a.,9.b.に見られるように、容認できない表現になる。

上で見た移動動詞のうち、bar-とyüür-を例に、統語情報を取りいれて語彙項目を記述すると次のようになる。

bar-

[
SPR <[1]>
COMPS <[2]>
ARG-ST <[1]:[3], [2]:[4]>
LCS [[1]ACT ON [3]]
CAUSE [BECOME [3]BE AT [4]]]

yügür-

SPR <1>
COMPS <>
ARG-ST <1:2>
LCS [[2]ACT ON [2] CAUSE [2]MOVE]]

これらの語彙項目（と原理、規則）により、
Tursun béketke bardi. 「トルスンは駅に行った。」
Tursun yügürdi. 「トルスンは走った。」
は認可されるが、

*Tursun béketke yügürdi.

トルスン 駅（与） 走った

は、béketke という句を認可する情報がないため、排除される。

Tursun béketke qarap yügürdi. 「トルスンは駅に向かって走った。」

は、認可されなければならないが、béketke qarap の部分を本研究では項ではなく付加語と考えるので認可されることになる。ただ、付加語にも何らかの制限はあると考えられるため、今後は、付加語についても研究する必要がある。

6. 結論

ウイグル語の移動動詞を分析・記述した。

ウイグル語の移動動詞について、本研究で明らかになったことは次のとおりである。

- ・有方向移動動詞と移動様態動詞がある。
- ・有方向移動動詞で、起点／着点指向のものは存在するが、経路指向のもので経路を独自の格としてとるものは見つからなかった。
- ・働きかけを意味する動詞に関しては移動の意味を持つものがある。
- ・舞踏動詞で移動を表し得るものは見つからなかった。

7. 今後の課題

動詞の後ろに別の動詞をつけて複雑述語にすることによって容認性が変化する場合があります、複雑述語についても解明する必要がある。

語彙概念構造と統語構造との関係について、一般的なリンキング規則を考える必要がある。

参考文献

- [1] 飯沼英三 (1992) 『ウイグル語辞典』 穂高書店.
- [2] 今泉志奈子・郡司隆男(2002) 「語彙的複合における複合事象」伊藤たかね (編) 『文法理論：レキシコンと統語』 東京大学出版会.
- [3] 影山太郎 (編) (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』 大修館書店.
- [4] 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』 研究社出版.
- [5] Arslan Abdulla (ed.). (2010). *Hazirqi Zaman Uyghur Tili. Ürümchi. Shinjang Xelq Neshriyati.*
- [6] Arziyev R. (2006). *Uyghur Tili. Almuta. Mektep.*
- [7] Daniel St. John (1993). *Uyghurche-In'glizche Lughet. Ürümchi. Shinjang Xelq Neshriyati.*
- [8] Jackendoff. R. (1990). *Semantic Structures.* Cambridge, Mass.: MIT Press.
- [9] Masaow Kojima, Ghalip Qutluq, Kamalidin Nizamidin, Qahar Samsaq, Xelchem Qutluq (ed.) (2010). *Uyghurche-Yoponche Lughet. Ürümchi. Shinjang Xelq Neshriyati.*
- [10] Sag I. A. & Wasow T. (1999). *Syntactic Theory: A Formal Introduction.* CSLI.
- [11] *Uyghur Tilining Izahliq Lughiti, Ürümchi. Muellim.*